

第一回 永久教育 生涯教育 生涯学習の長い長い道のり

世は生涯学習時代である。文部省や自治体の各種報告はいうにおよばず、産業界・財界の提言文や報告書にまでも、「生涯学習」や「生涯教育」の四文字がかまびすしく踊るこのころである。『ヒュー！勉強って学校だけじゃなかったの？死ぬまで教育ですか！もうゆるしてヨ』などという溜息は許されない。目的はきておいてもとにかく学習することがつくつく尊い世の中なのである。

ところが、この生涯「学習」なり「教育」の概念規定は、実のところははっきりしていない。

『与えられる』のが教育で、『みずから獲得する』のが学習であるとする単視眼的な解釈から、ところによつては『生涯学習教育』なる珍語まで出現する始末である。この語句の源が、ユネスコのラングランであるという程度のほかは、生涯にわたつての、「学習」と「教育」という語句をめぐる長い議論の過程を知る人は少ないのではないか。ここでそろそろ「教育」と「学習」の概念を整理しておくのも一考ではないか、なぜならそれらの検証を通して、人間が「死ぬまで学ぶ」という行為へのまなざしをとらえなおすことが「生涯学習」の本来の目的である（『人間の解放をめざす生涯教育の創造』海老原治善）という、聞いただけでも気恥ずかしくて目をそむけたくなるような、またそれでいて胸がドキドキするような感動を覚えるこの言葉に、私達自身が真正面から取り組む勇気を与えてくれることに繋がるのではないだろうか。

ラングラン Lengrand P. が、ユネスコの成人教育推進国際委員会で生涯教育なる語句と概念を提唱したのは一九六五年十月。今年でちょうど三六年になる。当時のプレス用会議のワーキングペーパーにはフランス語（開催地がパリでラングラン自身もフランス人）で *education permanente* とあった。直訳すればさしずめ「永久教育」といったところだろうか。日本から出席した波多野完治氏もこの日本語訳には、はたと（シャレではない！）こまっいたらしい。ところが翌日の英訳報道では *life long education* と訳されており、氏もこれをしてがかりに「生涯教育」なる日本語訳を思いついたという。（*life long education* という言葉は、アメリカではすでに産業教育の世界で使われていたらしいが）

というわけで、『生涯教育』なる日本語がかくもメデタク誕生したわけであるが、お気付きのとおり当時の原文に「学習（*learning*）」という語句は影も形もないのである。この「生涯教育」が、いかなる道筋をたどつて「生涯学習」へと変遷していったのか。これにはまた途方もなく長い議論の過程があった（いまでも一部関係者の間では続いている）のである。（続く）